

青い地球、白い雲

時がつくる。自然がつくる。おいしい水は、谷川岳の六つの地層に瀧過され湧きでる。遙かな時の流れに磨かれ、生まれた。まさに大自然の名作「名水 天清水」の宣伝の言葉である。六甲の名水やら富士の涌き水など自然是名水のアームである。水はたどって来る道筋を記憶し、深い味わいの水として湧きでて流れる。

水の匂（ひ）（じゅう）は夏ではなく秋から晚秋だとう。梅雨のころから夏にかけて降り注いだ雨が、森の木々からフカフカの絨毯のような落葉をすり抜け、ミネラルを溶かしながら、ゆっくりと地下深く滲みこみ、甘く、まろやか、な味わいの軟水として湧きだしていく。

分け入つても分け入つても青い山」の句を初めに、放浪漂泊の旅にてた俳人、種田山頭火は俳句や日記のなかに各地のおいしい水を詠んでいる。伯鷲大山の水はおいしいと語り、「へうへうとして水を味わふ」と詠んだ山頭火は、きき水の名人といわれている。生家の屋敷周りの水路にはいつも澄んだ水が流れ、山頭火の前の俳号を田螺公と称していた。田螺はタニシ、なにか水への深い憧憬と係りが感じられる。

落葉するこれから水がうまくなる」　水の味も身にしむ秋となり」

山頭火

水の匂を見事に味わっていた。

太陽系第三惑星の地球はこの豊かな水を湛えている唯一の惑星である。生まれ育ちや大きさが地球と似ている兄弟星の金星や火星の、あの荒寥とした無機質な姿とは、あまりにも対照的な生きた惑星のその根源に水の存在がある。気象衛星ひまわりから地球を眺めたら、無数の星を散りばめた漆黒の宇宙を背景に青い地球が浮かび、一メートル離れたところからみたバレボーリ大の大きさに見え

る。その地球には豊かな水を湛える海があり、薄く白い雲がへばりついている。地球がもし距離にしてほんの五%ほど太陽に近かつたら、水は失われ金星型惑星となり、遠ければ火星型の極寒の惑星となってしまう。その意味で絶妙な位置のある地球は水惑星として奇跡の星なのである。その源が奇妙な性質をもつた水なのである。

水は比熱が大きく温まりにくく冷めにくく、物を溶かすやすく、きわめて安定で、粘性も小さくサラサラしているといつた具合に優れた特別の液体である。人間の身体の六〇パーセントが水でできている所以である。“冷たい水”や高い圧力のもとで“熱い水”ができ、ふつうの水は水に浮くが、水に沈む水も可能となる。奇妙で複雑かつ寛大な性質をもつた水なくしては生きた地球は存在しないのである。水惑星と呼んではみだが、その実、地球全体からみれば水はほんの0.03%しかない。星の半分ほど水を含んでいる海王星や冥王星のほうがはるかに水惑星だが、こちらは極寒の動きを止めた氷の世界であり、「青い地球、白い雲」で象

徴される液体の水の存在こそが地球そのものである。

水は蒸発して水蒸気となり、雲に姿を変え、雨となつて再び海に戻る。この輪廻が地球を育み、多様な季節を演出してくれている。「平方公里あたりの上空までの気柱に含まれている水は平均3ミリ、年間の降る雨の量がおよそ1000ミリなので、1年で33回ほど水が循環することになる。海から解き放された水が、入れかわつて海に戻るが平均で一日となる計算になる。夕方降った雨が、今年の七回目分の輪廻の雨かもしれないなんて思うと、なにか神秘的で楽しくなる。降った雨は地下に滲みこみ川に流れる。世界の川に流れている水の量は、地球上にある水の総量のわずか百万分の一しかない。この水循環のなかで、私たちは川に流れる水を自然からの恵として、ほんの少しだけ使わせて貰つて、いるに過ぎない。日本列島に降る雨は平均で1800ミリ、約700億トンとなる。用水として利用しているのは上水道や工業用水で三二一億トン、農業用水の385億トン（九八年）と人あたり1リットルの牛乳パック400本ほどがを合わせても1割ほど。東京都の水道の使用量は1日約500万トンで東京ドームにして4杯分、人あたり1リットルの牛乳パック400本ほどが使われているが、人間が生きるために必要な水の量は「一日に1ないし2・5リットル。快適さのものは、いかに多くの水が使われているかがわかる。

春夏秋冬に梅雨と秋雨が加わる変化に富んだ季節に豊富な水をもつ日本人は、古来から上手に水

と付き合ってきた民族だといわれている。水との
対峙する闘いのみならず、水に深く融け込んだ東
洋的な思想が底に流れているように思える。循環
する水は有限であり、川に流れるのも有限である。
自然からの借りものである限りある水を、いかに
上手く使って、美しさを保ちながらまた自然に帰
せるかが問われている。八月一日は水の日。青い
地球、白い雲に思いをめぐらせ、宅急便で届いた大
清水の名水を飘々(ひょうひょう)と味わいながら、
永遠の命題に思いをはせてはいかがだらうか。